

2011年3月11日に発生した東日本大震災。復興に向けて何かできることはないか？多くの人がそう真剣に考えた。



松澤俊之

### 震災で知る日常のありがたさ

先日、非常勤で授業を担当している大学で、講師間の情報交換を行う機会があった。概ね、今年度の一年生の評判が良かった。東日本大震災の影響で、被災地から遠くに住む学生にも感謝の気持ちや周囲へ配慮する心が生まれているのではないかと、という話になった。

学生への印象も、その理由についても同意できた。似たような話は、大学に限らずいろいろな場所で聞かれそうだ。自分自身も背筋を伸ばし、居住まいを正したくなる。

自分よりも遥かに大きな存在、具体的には自然や歴史の力を目の当たりにした時に、人は自分の身の程を知る。そして、身の程をわきまえつつ、それぞれの領域で全力を尽くそうとする。「自分にできることは何か、できないことは何か。自分ができないことをやるのは誰か。誰にもできないことは何か。」多くの日本人が、そう自問し、それぞれの答えを探りながら前を向き始めた数ヶ月間であったろう。

### オリエンテーリングにできること

僭越と承知で、震災の人心への影響について言及してみたが、このような話は他でも言い尽くされて来たに違いない。この文章は、オリエンテーリング関係者がオリエンテーリングマガジンに投稿する記事である。「オリエンテーリングにできることは何か、できないことは何か」についても記しておきたい。

オリエンテーリングにできること。震災との直接的な関連で言えば、「地図読み・地形読みの能力や、危機管理の思想を防災対策に活かす」といった貢献策が思い当たる。今回の震災前後にも、何らかの形でこうした役割を果たされた方々がいることだろう。ただ、そこにおいては、恐らく役割を果たされた方自身の有能さや所属組織内での立場が物を言ったのだと思われる。防災対策について、日本のオリエンテーリング界全体として行政の要請を受けたわけでもないし、独自の指針を示しているわけでもない。冷静に評価してみると、「日本の防災のために、オリエンテーリングができることは、特にない」のかもしれない。

それはそれで、別に構わないと思う。オリエンテーリングは、実用術からの乖離を厭わずナビゲーションを先鋭化・ゲーム化していったスポーツであり、オリエンテーリング協会は、あくまでそうしたオリエンテーリングを統括するための組織、オリエンテーリングクラブはあくまでそうしたオリエンテーリングの楽しみ・喜びを分かち合うためのクラブである。関係者は、その身の程をわきまえ、その領域内で全力を尽くすべきであろう。

以前、オリエンテーリングに興味を持ってくれた知人を何度か練習会に連れて行ったことがあった。(いくつかのスポーツを習得した経験がある知人で、オリエンテーリングをする際も他のスポーツ同様、「たとえ新人でも、事前に練習してから試合に臨むのは当然」という考えで取り組んでいた。)

その知人に、「オリエンテーリングを通じて会得したナビゲーション能力が、日常生活にも役立つことがある」という話をした時、「別にそれはどうでもいいんです。僕はオリエンテーリングを何かに役立てようなんて思って

いません。ただ、やってみて楽しかったから次も来たんです」との返答があった。

反省させられ、自分自身も考えを改めるきっかけになる会話だった。「おもしろきこともなき世をおもしろく」。今、こうした時期に自分がオリエンテーリングの競技者や指導者、あるいは普及に関わる者としてすべきことは「自分自身がオリエンテーリングを堪能し、オリエンテーリングそのものの面白さを、伝えるべき場所で伝えるべき時にしっかり伝えられるよう準備しておくこと」であり、それ以外にはない、と考えている。

将棋のプロ棋士が、「今、被災地のために将棋ができることは、ない。でも、復興が進み、被災地の人々が限られた時間と場所で何か楽しみを、という段階になった時に将棋の出番があるような気がする」と語っていた。将棋とオリエンテーリングでは、文化としての定着度もゲームとしての特性も違う。即、将棋のようにはいかないにしても、人が日常の合間に何か楽しみを求めた時に「オリエンテーリングにも出番がある」と言えるようでありたい。

(松澤俊之)